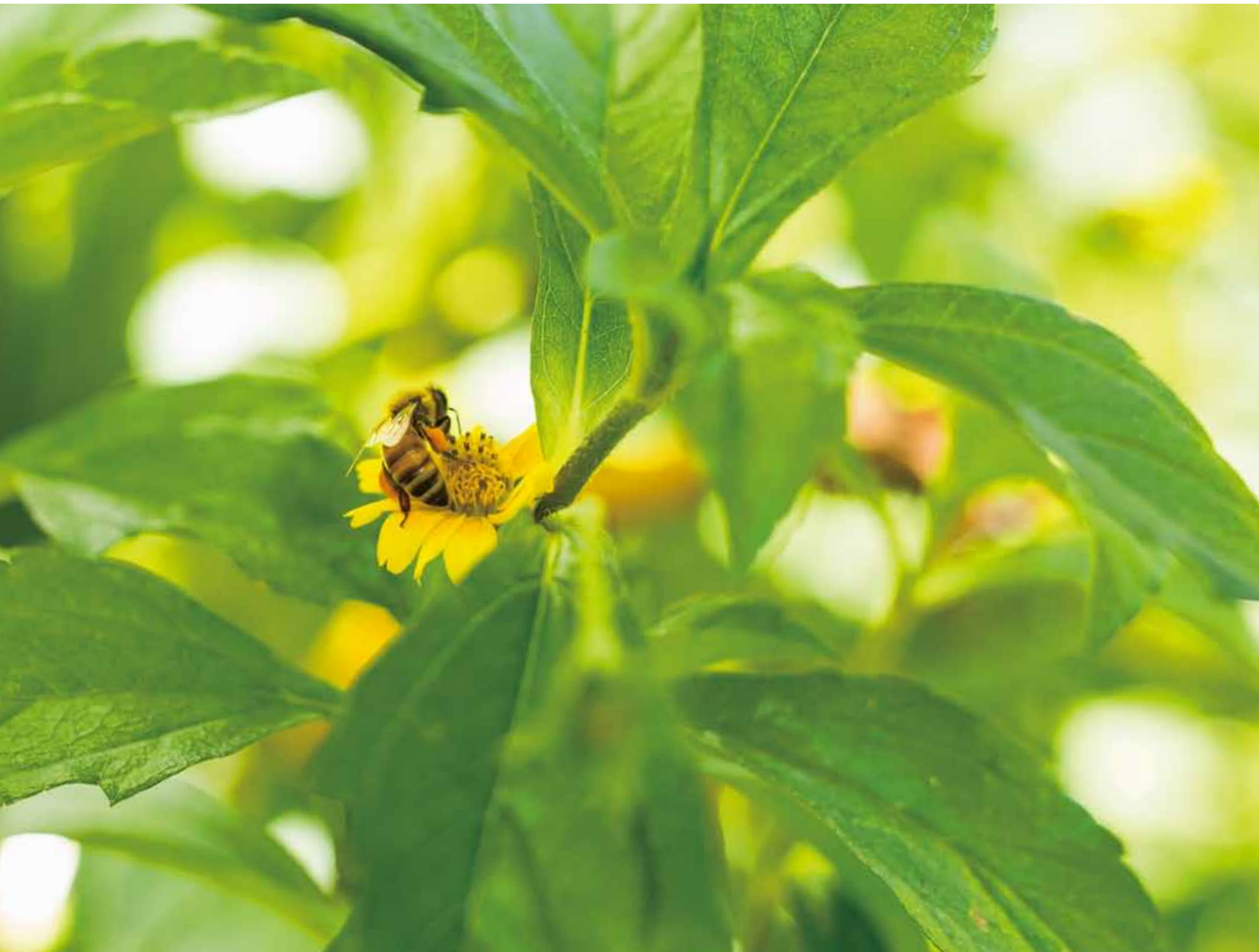


ミツバチストーリーズ

「やさしい養蜂」が、障害者と地域の可能性を広げる

農福連携養蜂事例集



発行・編集
一般社団法人トヨウミツバチ協会
〒104-0061 東京都中央区銀座3-9-11 紙パルプ会館10F
Tel:03-6277-8000 Fax:03-6277-8888
Mail:ginzainitiative@gmail.com

編集協力:株式会社ランドマーク
撮影:河野 豊

※本事業は、日本中央競馬会(JRA)畜産振興事業の助成により実施されます。



ハチミツ スマイル

はじめはちょっと不安だった、養蜂の仕事。でも、慣れてくればミツバチはかわいい。
採れたハチミツは、とっても甘い。みんなを笑顔にする、ハチミツの魔法。





ゆっくりと、巣に指を押し込むと、じわっと出てくる、黄金色の輝き。
ハチミツって、こんな風に出てくるんだね。



ハチミツ、あまーい！





最初は、おそろおそろ。でも、慣れてくれば、笑顔も出てくる。
養蜂には、驚きと気づきが、詰まっている。



慣れればたのし、養蜂作業

障がい者が参画する 養蜂環境調査研究事業について

一般社団法人トウヨウミツバチ協会

代表理事 高安和夫



千葉の房総に最近独立した研究熱心な養蜂家がいると聞いて、坊内養蜂園の鈴木一さんを尋ねたのは二〇一五年の秋晴れの日であった。「もし来るなら水曜日にして下さい。『はあもにい』のみんなが来るので、彼らの（仕事の様子も見てください）。はあもにいとは、障害者の就労支援に取り組みNPO法人はあもにいのことで、毎週水曜日、施設外就労で坊内養蜂園に来ているそうだから。その日は職員の方と3名の利用者さんが来ていた。もう既に養蜂シーズンは終了していたのでその日の仕事は巣箱や巣枠の組立などの木工作業であった。一人ずつ鈴木さんから作業の説明を受ける。「ひとりに複数の仕事を与えると混乱してしまうが、自分の役割が分かるとコツコツと取り組んでくれます」。それは養



蜂作業でも同じだそう。障害者の利用者さんにも得手不得手があり出来る作業を分担する。例えば巣箱を開ける係、燻煙器で煙をかける係、巣枠を運ぶ係、チームで仕事を分担すること作業効率も上がる。「養蜂作業を通して、障害を持つ人たちが社会と関わりを持つことが一番大事だ」と鈴木さんは強調する。「障害者と養蜂」について調べると海外では知的障害や精神障害を持つ方の事例や社会参画の一貫で取り組む事例が多数あり、障害者と養蜂は日本に比べベビュラーのようだ。

そして自然栽培パーティの佐伯康人さんは、「障害を持つ仲間たちは身体も繊細で農薬などの化学物質に弱い。だから農薬に弱いミツバチに共感します。僕らの農場や果樹園は自然栽培だからミツバチにも安全だし、蜂蜜が収穫できれば収益向上にもつながります」と言う。そこで女性でも取り扱いが容易な養蜂具の開発経験を活かし、JRA畜産振興事業の助成を受け、障害を持つ方でも扱いが容易な養蜂

具の開発と飼育方法の検討が始まった。この冊子では各地で試験飼育に取り組む就労支援事業所の様子を紹介する。職員の皆さんと利用者さんが協力して養蜂に取り組むことで、さらに地域との連携が産まれる。収穫した蜂蜜が地域を代表する地元の特産品に選ばれた事例や、地域の応援を受けて耕作放棄地を開墾した果樹園に巣箱を設置した事例。収穫した蜂蜜でパンケーキを焼くダウン症の店長さんは、ミツバチは怖いけど蜂蜜は大好きだ。養蜂チームの収穫した蜂蜜を自慢げにお客さんに勧める。今まで休みがちであった利用者さんが、ミツバチが気になるため毎日来るようになった事例など、養蜂が就労支援事業に及ぼす効果は計りしれない可能性を持つ。

農福連携養蜂の検討は始まったばかりだが、今後さらに発展させていくために、地域の皆様、関係各位のさらなる理解と協力をお願いして巻頭の挨拶とさせていただきます。

平成二〇年十二月吉日

全国に広がる！ 農福連携養蜂の仲間たち

今回事業に参画して下さった、全国の施設です。



奄美大島

障害者支援施設あまみん
(鹿児島県奄美市)

P.43



沖縄

新垣養蜂園
(沖縄県那覇市)

P.29

ソルファコミュニティ
(沖縄県中頭郡)

P.35

楽ワーク福祉作業所
(沖縄県南城市)

パーソナルアシスタント青空
(愛媛県松山市)

P.17

ワークハウスほのぼの
(鹿児島県霧島市)

縁活 おもや
(滋賀県栗東市)

P.45

手と手就労支援センターしずく
みのり菜園
(北海道余市郡)

P.44

共働学舎 新得農場
(北海道上川郡)

ハーブ農園ベザン
(石川県金沢市)

米ライフ
(石川県河北郡)

P.44

日本くらしの森ネットワーク
(福島県福島市)

筑峯学園
(茨城県つくば市)

P.23

はあもにい
(千葉県千葉市)

P.11

こうやファーム
(千葉県鴨川市)

埼玉復興
(埼玉県熊谷市)

P.41

スマイルベリーファーム
(静岡県富士市)

P.46

無門福祉会
(愛知県豊田市)

P.45

障害者は 養蜂の「戦力」だ

「はあもにい」は、
農福連携養蜂の「お手本」のような存在です。
作業を見学させてもらおうと、
障害者を「戦力」にする
さまざまな工夫が見えてきました

明るい日差しの下
草原の上で仕事

「エレナちゃん、『来週ハチミツしぼる』って書いておいて」。鈴木一さんが、大きな声で指示を出すと、白い服の「エレナちゃん」が、手に持ったノートになにか書き込む。その間に次の巣箱をのぞき、他の人に「じゃあ、上を開けようか」と声をかける。作業の途中であたりを見回し、鈴木さんは突然「お前、今日、へそ曲がっているだろ」。見ると一人、作業に参加していない部員がいます。声はかけたものの「こんな日もありますよ」と、あまり気にしない様子でどんどん作業を進めていきます。鈴木さんのきびきびとした声と、周りののんびりしたテンポがいいコントラスト。気づけば、一つの巣箱から別の巣箱へ。作業は確実に進んでいるようです。

ここは千葉県君津市にあるカトリック修道院「宗教法人聖心の布教姉妹会久留里修道院」。ここに特定非営利活動法人はあもにい「養蜂部」の巣箱があります。養蜂家で、はあもにい養



鈴木さんの言葉を書き留める係の「エレナ」さん

蜂部部长でもある鈴木一さんの指導のもと、五名の障害者が、就労継続支援A型事業所の枠組みで、養蜂作業に従事しています。

ハチが苦手なら、
記録係ができる

「もう彼らは完全に『戦力』ですよ。強い日差しの中、木陰に置かれたミツバチの巣箱。その周りで作業する障害者たちを見ながら、鈴木さんは言いました。

「彼らは、きちんと指示をすれば、その通りに動ける。それこそ一日中でも。





「からずんしょう」のハチミツをかけて楽しむプリンは、人気商品だ



特定非営利活動法人はあもにい代表・長浜光子さん

**地域の「困りごと」を
養蜂と障害者が解決する**

久留里修道院には、敷地約二万坪の広大な土地があります。鈴木さんの奥様が協会に通っている関係で、巣箱を置かせてもらえることになりました。この修道院では、シスターの高齢化が進み、広い敷地を管理し続けるのが難しいという課題がありました。「そこに我々が養蜂をさせていただけながら、草刈りなど管理のお手伝いをしているんです」。今後はこうした形で、地域の課題を解決するために養蜂を活用し

巣箱のふたを開ける作業だったら、重しの石を取って、トタンを外す。何度も、まったく同じやり方で繰り返し返すことができる。そこまでの集中力や根気は、僕らにはない。集中が切れるか、『工夫』して、別のやり方をしようとしてしまう。それがハチにはよくないんです。いつもと違ったことをすると、ハチたちを刺激してしまうんです」。ハチが苦手だったとしても、養蜂に、障害者の仕事はあるのだといいます。冒頭の「エレーナ」さんの仕事が多分にそれです。彼女はハチが苦手な作業を触ったりはできませんが、記録係として、作業日報や、次の作業時にすべきことなどを書き留めておくという重要な役目を担っています。

このように、障害者一人ひとりの特性を理解し、適切に作業を振り分けることで、彼らの能力を引き出すことができるのだといいます。「養蜂には、とても多くの仕事があります。それを細かく分けていけば、どんな特性の人にもあう仕事がある」と鈴木さん。全体の判断と指示を、鈴木さんが担えば、そのほかの具体的な作業は、すべて障害者でできる、と鈴木さんは言います。

君津市の久留里修道院から車でおよそ四〇分、千葉市内の閑静な住宅地の中にあるカフェ「コミュニティカフェ b(ふらっと)」へ移動してきました。はあもにいが運営するこのカフェでは、養蜂部が採った自慢のハチミツを使ったメニューを提供したり、商品を販売したりしています。カフェの自慢は、ハチミツをたっぷり使ったレモネード。また、様々な種類のハチミツをかけて食べるプリンは、「おもたせ」としても好評です。

代表の長浜光子さんは、養蜂は、自分から積極的に始めようと思ったのではないといいます。もともと事業としていたカフェ、製菓の原材料として、できるだけ地元の食材を使いたいという思いがあり、千葉の食材を探しているときに鈴木さんと出会い、鈴木さんの

**地域の「困りごと」を
養蜂と障害者が解決する**

ていきたいと、鈴木さんは言います。「やっぱり、地域に障害者の姿を見せていきたいし、地域の中で、お互いに支えあっていくような動きをつくりたいんです」と意気込みます。



「はあもにい養蜂部」責任者・鈴木一さん



巣箱を置かせてもらう代わりに、修道院の環境整備を行う



鈴木さんの指導のもと、自分の役目を果たす養蜂部員

方から「やってみませんか」と進められる形で養蜂事業に乗り出したのだといえます。「私自身、養蜂なんてまったくやったことがなくて、イメージがわからなかったのですが、鈴木さんに養蜂作業について詳しく聞くうちに『この作業ならこの人にやってもらえそう』とイメージが湧いてきた」のだそうです。

「カフェや製菓を事業として行う中で、その仕事に『向かない』人がいることもわかっていました」。たとえば作業能力は高くても、衛生意識があまり高くない人などは、飲食の作業をすることができません。カフェもお菓子作りも難しい人でも、野外での養蜂作業ならできるのではないかと。長浜さんは、より多様な人に対して働く場を提供できればとの思いで、養蜂をはじめました。

地元の養蜂家に 教えを請いながら

五年前に養蜂をはじめ、今では障害者が戦力として活躍している様子は冒頭で紹介した通りです。この五年の間に、「はあもにいのハチミツ」は評価を

高めてきましたが、その象徴ともいえるのが、ピリッとスパイシーな「カラスサンショウ」のハチミツ。

「カラスサンショウは全国にある植物なのですが、うちの周辺のように群生しているところは珍しいんです」と長浜さん。通常は商品価値が低く、養蜂家によっては「雑蜜」として人にあげたり、捨ててしまったりするカラスサンショウを前面に押し出すことで、「はあもにいのハチミツ」の特色を出すことができました。「うちのハチミツは加熱処理をしない『非加熱』も特色です。少量多品種で、地域の味のハチミツを楽しんでもらいたいですね」と長浜さん。障害者の働きが、はあもにいのハチミツを全国に広げています。

施設名：特定非営利活動法人
はあもにい
所在地：千葉県千葉市
養蜂開始時期：2013年11月
ハチの種類：セイヨウミツバチ
巣箱の数・種類：標準単箱50箱

自然栽培のかたわら 養蜂に取り組む障害者

「うわー！すごい」。見上げると、高い木の梢に、黒い塊が。よく目を凝らしてみると、たくさんミツバチが固まって、木の枝に集まっています。これは「分蜂」といって、ミツバチが巣箱を離れて「お引越し」をするときにできるもの。巣に新しい女王バチが生まれた時に、古い女王バチが働きバチを連れて、別の場所に移動するのです。「しまったなあ、知ってれば新しい巣箱に入ってもらったのに」。残念がるのはメイドイン青空の佐伯康人さん。障害者就労のみならず、自然栽培の分野でも全国に名を知られる「農福連携」の先駆者ですが、養蜂は少し勝手が違うようです。それでも楽しそうな表情で木の上を見上げながら「今から虫取り網で、とれないかなあ」。若干本気が混じったその発言に、周りで作業していたスタッフも利用者も、苦笑い。

ここは愛媛県松山市、町の中心部



木の枝にミツバチが集まる「分蜂」

から少し離れたこのあたりは、農地と住宅が混在しています。メイドイン青空では、この松山市を舞台に、障害者が自然栽培にチャレンジしています。自然栽培とは、農薬も肥料も使わずに、自然の持つ力を利用して行う農業のこと。「健康にいい」ことはもちろん、作った野菜やお米のおいしさが評判を呼び、メイドイン青空の野菜やお米は全国で知られるようになり、東京都内の有名レストランなどでも、作った野菜が使われるようになりました。

メイドイン青空が養蜂をはじめたのは、二〇〇九年のこと。今は、養蜂担

養蜂×農業×福祉が 日本の課題を解決する！

愛媛県松山市で

自然栽培に取り組む、メイドイン青空。

代表の佐伯さんは

「農業と養蜂と福祉が、日本を救う」と言います。

いったいどういうこと？ 話を聞かずに、愛媛に飛びました。





メイドイン青空養蜂担当・西口徹也さん



メイドイン青空代表・佐伯康人さん



ハチたちの様子を確認する

当の職員、西口徹也さんと数名の利用者が、農作業のかたわら、三箱の巣箱で養蜂を続けています。巣箱は、毎日世話をする必要はなく、気づいたときに様子を見に行くだけでよいので、農作業との兼業がしやすいことも、養蜂のいい点です。「その時々で、手の空いている利用者と世話をしに行ったり、時には私一人で行くこともあります」と西口さん。養蜂の経験はありませんが、佐伯さんらの指導を受けながら、少しずつ経験を積んでいます。この日は巣箱の様子を見て、ハチミツを少し採りました。巣箱はフローハイブという

方式で、箱を開けずに中の様子を見ることができ、さらにハチミツを採ることができるので、経験のない人や障害のある人でも、養蜂がしやすい巣箱になっています。

自慢のパンケーキに 自家製のハチミツを添えて

「あおぞらベジィ」は、メイドイン青空が運営するレストラン。自然栽培で作った野菜やお米を使ったメニューが評判です。特に人気なのが「ベジィランチ」。日替わりのメインディッシュに、スープ、サラダがついてお手頃価格。近隣の会社員や主婦層がよく注文する看板メニューです。

あおぞらベジィのもう一つの看板メニュー、パンケーキに、養蜂で採れたハチミツが使われています。まだまだ安定した量が採れるわけではないので、「ある時限定」になってはしまいますが。あおぞらベジィのシンボル「ダイちゃん」が、パンケーキを作って、サーブしてくれました。ダイちゃん、まずは厨房でパンケーキを焼きます。生地を鉄板に流し込み、タイマーで丁寧に時間を計り、ひつ

くり返して両面をこんがり。出来上がったパンケーキに、養蜂で採れたハチミツを添えて、ニコニコ顔でテーブルまで運んできてくれたダイちゃん。ランチメニューの説明も得意。「おいしいですか?」と聞かれて、はいと答えると「よかったよかった」とさらにニコニコ顔。見ているこちらも、うれしくなります。

障害者とミツバチが 日本の農業を救う

「今、日本の農業はさまざまな課題を抱えています。僕は、障害者と養蜂が、その課題を解決すると考えているんです」と話す佐伯さん。佐伯さんたち障害者施設で農業に取り組む「農福連携」の仲間たちは、農業によって障害者の働く場所を作り、また障害者の生活の自立のために収入の向上を目指すと同時に、日本の農業が抱える後継者不足、農業の担い手不足、またそこから発生する耕作放棄地の増加といった課題に取り組んでいます。さらに近年、大きな課題となっているのが、ミツバチが大量にいなくなる、という現象が世界的に起こっているとい



甘いハチミツを、たっぷりかけて



パンケーキを焼くのは、ダイちゃんの仕事



フローハイブの巣箱なら、簡単にハチミツを採ることができます

施設名:メイドイン青空
 所在地:愛媛県松山市
 養蜂開始時期:2009年5月
 ハチの種類:セイヨウミツバチ
 ニホンミツバチ
 巣箱の数・種類:フローハイブ3箱

うことです。もちろん日本も例外ではなく、各地でミツバチが姿を消したり、大量に死んでいるのが見つかったりといった報告が寄せられています。原因については諸説あり、まだはつきりとしたことはわかっていませんが、有力な原因の一つとして挙げられているのが「ネオニコチノイド系」の農薬。特に田んぼに使われることが多いこの農薬が、ミツバチに悪影響を与えているのではないかというのです。「一説には、この農薬がミツバチの方向感覚を狂わせてしまい、

巣に帰ることができなくなってしまう、ということが言われています」(佐伯さん)。ミツバチの持つ受粉の力は、農業に欠かせないと、佐伯さんは言います。「ミツバチたちがいなくなったら、農業は壊れてしまう」。農薬を使わない自然栽培は、ハチに負担を与えないために、養蜂とも相性がいいのです。障害者とミツバチが、日本の農業を救う。ささやかかもしれないけれど、しっかりとした取り組みが、もう始まっているのです。



ハチミツたっぷりの巣が採れました

大きい巣が採れた！ 里山のニホンミツバチ

難しそうなイメージのある、ニホンミツバチの養蜂。福祉施設がチャレンジをはじめました。養蜂もはじめてなら、ニホンミツバチもはじめて。でも、ほら、立派な巣が育っていますよ。



里山の環境を生かして
障害者の仕事を増やす

茨城県つくば市、日本百名山である筑波山の山麓に、筑峯学園があります。入所施設、通所作業所、グループホームなど様々な形で、知的に障害のある児童の暮らしと育ちを支援しています。

通所作業所「障害者支援センター未来」の仕事で大きな割合を占めるのが、農業。周辺を山に囲まれている筑峯学園では、豊かな自然の恵みを生かし、稲作や畑での野菜作りに取り組んでいます。他にも、陶芸や木工芸、炭焼きなど、里山ならではの仕事もしています。

筑峯学園が養蜂をはじめたのは、昨年（二〇一七年）のこと。農業の傍らでできることを探していましたが、里山に囲まれた環境を生かして、養蜂、とりわけニホンミツバチの飼育に乗り出すことにしました。障害者支援センター未来・センター長の松島寿樹さんは「事業の柱にしようと言うことで

はなく、様々な障害特性のある人たちに、それぞれの特性を生かした働く場をつくれなかったか、という取り組みの一つとして考えました」と、養蜂に着目したきっかけを話します。

養蜂について調べる中で、近隣の養蜂家・長谷川清さんとの出会いもあり、筑峯学園には、ニホンミツバチの養蜂が向いているのではないかと考えに至りました。「ニホンミツバチは在来種です。こちらで巣箱を用意すれば、向こうからやってきてくれる。幸いここには豊富な自然があつて、もともとニホンミツバチがたくさんいることが期待されました。



障害者支援センター未来・センター長の松島寿樹さん



施設周辺の里山に、日当たりなど環境を考えて四か所の巣箱を設置した



養蜂を指導する長谷川さんは、ニホンミツバチのエキスパートだ



ニホンミツバチの巣箱は、下からライトを照らして確認します

飼育は、良くも悪くも『ハチ次第』のところがあつて、それほど手間をかけなくても条件が合えば巣箱に定着して蜜が採れるようになりますが、その一方で、巣箱が気に入らなくなれば、すぐ出て行ってしまう難しさがあります」と、養蜂担当の井上大志さんは話します。事業の柱ではなく、障害のある人の働く場所の一つとして考えていため、効率や確実性よりも始める時の手軽さや、筑峯学園周辺の自然環境との親和性を考え、ニホンミツバチの飼育を始めることを決めました。もちろんそこには、指導をして下さる長谷川さんの存在も欠かせませんでした。

**地元の養蜂家に
教えを請いながら**

ニホンミツバチの巣箱は、セイヨウミツバチのものとは造りが違います。中の様子を見る時には、巣箱を開けて見ることはできません。そこで巣箱の下を開けて、下から手鏡で見ると、手順を踏まなければなりません。最近ではスマホの自撮りモードや、デジカメな

どを使って確認するやり方が主流だそうです。セイヨウミツバチと違って、完全には巣の中の様子がわからず、どれくらい蜜がたまっているのかを把握しにくいのですが、定期的に採蜜してあげないと「スムシ」という、蜜蠟を食べる虫が発生してしまうのだそうです。

ニホンミツバチの群れが定着しているこの場所は、学園内の、里山道の傍らの草むらの中。夏は、朝は日が当たるけれど、昼間は日陰になって涼しい場所の方が、ハチにとっては居心地がいいのだそうです。一方、冬は陽だまり



筑峯学園養蜂担当・井上大志さん



でポカポカするこの草むらは、ヤブ蚊がいっぱいいて、作業は少し大変だけれど、ニホンミツバチにとって住み心地のいい場所になっています。里山に囲まれた筑峯学園には、様々な条件の異なる自然環境があります。だから、ミツバチにとって最適な環境を探すことができるのです。

**ニホンミツバチの
気まぐれもなんのその**

ニホンミツバチならではの飼育の難しさもあります。ニホンミツバチは「飼われている」という感覚が希薄なため、巣箱に定住しにくく、ちょっとした環境の変化などで、すぐに出て行ってしまいます。筑峯学園でも、今年（二〇一七年）の夏、大きな台風が来てから、それまで巣箱に住みついていたニホンミツバチが、いなくなってしまうたそうです。「台風が過ぎてからしばらくは数十匹ほどは残っていて、巣箱に出入りしていたんですけど、やつぱりしばらくして、中に入っていたハチもみんないなくなってしまう」（井上さん）。学園内の四か所に設置した巣箱のうち一つか



慎重に、ナイフで巣枠から巣を切り出します

らニホンミツバチがいなくなってしまう
そうです。それでも残りの四箱には、な
んとかハチが残っています。気まぐれなニ
ホンミツバチがどうすれば巣箱に定着
してくれるのかは、なかなか難しいので
すが、環境の異なるいくつかの場所に
巣箱を置いて、どこが気に入るかを様
子を見るなど、気長にニホンミツバチの
気まぐれに付き合っていくのがコツのよ
うです。

**採れた巣を運んで
みんなでミツを採る**

「じゃあ、開けてみましょう」。長谷
川さんの指示で巣箱を開けて、中の巣
を取り出します。どうやら、たくさん
のミツが入っているようです。一緒に作
業する利用者も、ワクワクの表情。慎
重にハチを払いながら巣箱を開け、巣
枠ごと運び出します。近くの作業所
まで、みんな一緒に巣枠運び。部屋の中
で、巣枠から巣を切り離します。中
にまだハチが残っているかもしれません
から、気をつけて。ニホンミツバチは巣箱
の中で自由に巣をつくるので、成長し
た巣は、グネグネとした独特の形を

しています。さあ、たくさんミツが採れ
るかな。グイッと指を押し付けると、
ジュッ、とミツが沁みだしてきました。み
んな嬉しそう。採れた巣は、搾ってハチ
ミツにするもよし、細かく切って巣蜜に
するもよし。里山の楽しみと利用者の
仕事が、一つ増えましたね。

さあ、ミツは入っているかな？



施設名：筑峯学園
所在地：茨城県つくば市
養蜂開始時期：2016年4月
ハチの種類：ニホンミツバチ
巣箱の数・種類：重箱式巣箱5箱

亜熱帯のジャングルの中に ミツバチの巣箱

「じゃ、出発します」。みんな乗り込んで、バンが動き出しました。ここは沖縄県北中城村。合同会社ソルファコミュニティの事務所は、沖縄本島の東海岸沿いを走る国道三二九号線に面した場所にあります。心地よい潮風を感じるこの場所から、車に乗ることおよそ10分。細い道をくねくねと登って、着いたところは、うっそうとした森の中。本州とは違う沖縄特有の植物が生い茂り、湿り気を帯びた、熱い空気が漂います。

海からわずか10分の「ジャングル」の中に、ぼつかりと空いた空間が、ソルファコミュニティが開墾した農場です。開墾には、元日本代表のサッカー選手・高原直康さんがオーナーを務めるサッカーチーム「沖縄SV」（おきなわエスファウ）の選手たちも手伝ったそうです。ソルファコミュニティの活動や理念に高原さんが共感、一緒になって農業に取り組んでいるのです。



海のそばのソルファの事務所から、山の方へ。車で10分

就労継続支援A型事業所として、最低賃金を保証しながら、障害者の働く場を提供しているソルファコミュニティ。沖縄SVとの連携だけでなく、地域の耕作放棄地を活用したり、地元巨大商業施設「イオンモール沖縄ライカム」での定期的な野菜販売など「農福連携」をキーワードに、地域のさまざまな人たちと連携を進めています。そうした流れの中で、養蜂にも地域連携の可能性を感じているそうです。

ソルファコミュニティ代表の玉城（たまき）卓さんは「もともと個人的に養蜂に興味はあったのですが、トウヨウミツバ

台風もなんのその！
「ジャングル」の中で、
ミツバチは元気

沖縄で養蜂をやるなら、「台風」との付き合い方を知らないといけません。北中城の山の中、ジャングルを切り拓いた畑の中で、台風に負けずに、養蜂を続けている人たちがいます。





沖縄の主要な蜜源植物の一つ、センダングサ



「ソルファコミュニティ」養蜂担当・松田和也さん



「ソルファコミュニティ」代表・玉城卓さん

チ協会の高安さんとの出会いをきっかけに、ソルファコミュニティでも養蜂をやろうと考えるようになりました。そこで、高安さんと相談し、養蜂に興味のある沖縄の福祉施設が集まり、地元養蜂家などと呼んで養蜂講座を開こうという話になりました。最初はハチミツを採ってみたい、という単純な動機でした、と笑う玉城さん。ソルファコミュニティの事業に組み込むにあたっては、収益性にも期待しています。「ハチたちが自分で働いてミツを集めてくれるので、うまくやれば農業よりも高い収益性が見込めると思います」。

ハチの観察が与えてくれる「気づき」

玉城さんのもとで、養蜂事業を担当するのは、松田和也さん。農業大学校を卒業した農業のプロフェッショナルですが、養蜂の経験はありません。二〇一七年八月にうるま市で行われた養蜂講習会に参加して、はじめて養蜂に触れました。「はじめは、刺されるんじゃないかという恐怖が強かったですね」と振り返ります。「でも講習会で見ていたら、ハチがいついついた巣枠を持ちあげても、全然大丈夫だということがわかって、イメージが変わりました」。

松田さん自身に恐怖があったくらいですから、「利用者さんの中に怖がっている人もやっばりいます。ハチは絶対ダメ、って」。ハチを怖がらない利用者や、「自分たちでハチミツをつくって、販売できたら」と考える意欲の高い利用者を中心に養蜂事業をはじめ、「じゃあ僕もやりたいな」と、広がっていきばいいと考えているそうです。

松田さんは、利用者が今後ハチと付き合っていくうちに、ハチを観察しながら、いろいろな気づきを得てくれるのではないかと期待しています。「たとえば、台風の際に巣箱の様子を見てみると、巣の入り口にたくさんのハチが密集しているんです。なぜなのか。暑いから、とか、風が強くて外に飛び出そうにも飛び出せない、とかいろんな理由が考えられますけど、僕は巣を守っているんじゃないかと思っただんです。正しいかどうかはともかく、そうやってハチの行動を見ながらいろんなことを考えることが大事なんだと思っています」。

夏の養蜂は、台風対策が大きな仕事

沖縄といえば台風。養蜂にあたっては、台風とどう向き合うかが大きなカギになります。ソルファコミュニティ養蜂担当の松田さんは「今年、すでに二回くらい台風が来ています(笑)。夏からは、養蜂の作業というよりは、ハチの台風対策をするということに精一杯でした」。蜜をとるのもままならず、とにかく無事に台風をやり過ごす時間が続きます。台風対策の基本は、巣箱が倒れないようにすること。周りに杭



密林を開墾した農場の片隅に、巣箱はある



を打ったり、重しを乗せたりします。万が巣箱が倒れてしまうと、ハチたちは行き場をなくしてしまい、散り散りになってしまいます。そうなれば、結局はその巣箱のハチは全滅。ですから、まずは巣箱を守ることが最優先になります。

無事に台風をやり過ごしても、まだまだやらなければいけないことがあります。台風のと一か月は花が咲きません。ミツバチのエサであり、ハチミツの原料となる花蜜・花粉が全く取れなくなってしまうのです。巣やハチたちの様子を注意深く観察しながら、必要に応じてエサとなる砂糖水を与えたりしてハチたちが弱らないように気を配ります。

沖縄ならではの苦労もありますが、一方で島バナナなど沖縄独自の作物を蜜源植物とすることで、オリジナルな味が期待できるのも、沖縄での養蜂の特色です。ソルファコミュニティではまだ採れたハチミツを商品化していませんが、オリジナルな商品ができれば、収益につながり、障害者の収入につながるでしょう。

**養蜂をテーマに
地域に広がっていく**

ソルファコミュニティでは、ゆくゆくは、養蜂をテーマに、地域と交流しながら、自分たちの活動を幅を広げていきたいという考えがあります。「養蜂指導をしていただいている、那覇市首里の新垣養蜂園さんがモデルです。新垣養蜂園さんでは、近くの小学校で養蜂の授業をしてらっしゃいます。もし僕たちにそういうことができれば、働く障害者の姿を、地域に広げることができると。いっつかはやってみたいですね。すでに紹介したように、農業では地域との連携を進めています。障害者の仕事としての収益性と、地域とつながり、広がっていくという社会性を兼ね備えた農福連携養蜂の未来に、期待しています。

施設名: 合同会社
ソルファコミュニティ
所在地: 沖縄県北中城村
養蜂開始時期: 2017年9月
ハチの種類: セイヨウミツバチ
巣箱の数・種類: フローハイブ3箱



おそろおそろ、巣の様子を見てみよう

南城市の新名産 「百花はちみつ」誕生！

福祉施設のハチミツが、
地域を代表する名産品になりました。
それだけではありません。
養蜂の仕事は、施設全体にいい影響を与えます



南城市が認めた 楽ワークのはちみつ

沖縄県南城市は、沖縄本島の南部にあります。沖縄屈指の霊場・パワースポットとして知られる「斎場御嶽（せいふあうたき）」は、世界遺産に登録され、日本中はもちろん、世界中から多くの観光客を集めています。

その斎場御嶽の近くにある「南城市地域物産館」で販売されているのが、就労支援事業所「楽ワーク福祉作業所」でつくったハチミツ「百花はちみつ」。一〇〇％地元南城市産のハチミツを、加熱も加糖もせず、そのままろ過してビン詰めした、「ここ」しか手に入れることのできないハチミツです。

沖縄県は昔から養蜂が盛んでしたが、そのほとんどは、全国他の養蜂業者に向けミツバチを出荷する「種バチ」の養蜂で、ハチミツを採るために養蜂を行う人は少なかったとのこと。だから沖縄県産のハチミツは珍しいのだそうです。そうしたこともあって、楽

ワークのハチミツが、地元の名産品として認められ、物産館での販売が決まりました。さらに今年（二〇一八年）の夏には、南城市の地域資源を活用した商品を公募・審査を行い、南城市推奨品として認定する「南城セレクション2018」推奨品にも選定されました。福祉事業所の授産品であることや、障害者がかかわっていることは関係なく、楽ワークのハチミツの品質や独自性が、南城市の名産品にふさわしいと認められていることです。



「百花はちみつ」のパッケージは、玉城さんがデザインした。小ぶりの瓶のサイズも、お土産にピッタリ



利用者も巣枠を持って作業する



養蜂は、B型の「稼ぎ」を生み出せるか？

楽ワークが養蜂をはじめたのは、昨年（二〇一七年）九月のこと。「一年ではちみつを採って商品化までこぎ着けた。上出来だと思っています。」と話すのは、楽ワークで養蜂事業を担当する玉城（たましろ）達矢さん。サービス管理責任者として、養蜂だけでなく、楽ワークのすべての事業をしています。

楽ワークは、二〇一一年の設立。今年（二〇一八年）で、七年目になります。三六人いる利用者は、障害の程度などによって、就労継続支援A型、B型、就労移行支援事業のそれぞれの枠組みで働いています。最低賃金を保証しなければならぬA型では、農業が主な事業。なかでも小松菜が、収益の柱になってくれているそうです。「小松菜は通年栽培でき、単価も高い。A型の収益事業としては小松菜を中心に考えています」。農業が好調な一方で、B型の利用者の仕事をどうしていけばいいのか、悩んでいました。「B型の事業収益を上げたかった。現状、ややマイナス

スになっているので、それを少しでもプラスに近づけたかったのです」。

地元の養蜂家に
教えを請いながら

B型の利用者は、これまで手芸など室内での軽作業を中心とした仕事をしていました。手工芸は、地元の専門家にデザインや指導してもらいながら、手作業で質の高いハンドバッグなどの小物を作っていますが、なかなか収益にはつながらないといいます。「大きな課題は販路です。商品は評価も高く、リピーターのお客様もいらっしゃるのですが、バザーなどイベントでの販売が主で、定期的に販売する場所がないのです」。二〇一七年の夏ごろに開か

れた、沖縄の養蜂勉強会に参加したことがきっかけで、養蜂事業に踏み出すことを決意しました。

養蜂の経験のない玉城さんでしたが、先述の養蜂勉強会で知り合った、那覇市首里で古くから養蜂業を営む「新垣養蜂園」三代目の新垣（つとむ）さんと知り合ったことが大きかったといいます。「基本的なやり方はすべて、気候など微妙な環境の変化にどう対応すればいいのかは、経験が必要です。迷ったら、そのたびに新垣さんに教えていただいています。新垣さんがいなければ、養蜂は続けられなかったと思います」。

ハチの「受粉力」が
農業もよくする

養蜂の作業に従事しているのは、B型の利用者です。週に一〜二回巣箱の世話をするほかに、採った蜜の瓶詰め、ラベル貼りなどの軽作業もあります。「養蜂は、A型の利用者が従事している農業にも、いい影響を及ぼしているのではないかと思います」と玉城さん。養蜂を行うことで、受粉（ポリネーション）の効果があるのだといいます。



島バナナも、蜜源植物のひとつ



新垣さん（左）の指導を受ける玉城さん



「楽ワーク福祉作業所」施設管理責任者・玉城達矢さん



ハチ払い機があれば、巣枠上のハチも簡単に払える

農作物の収穫量や、作物の質が向上するのではないかと、期待しています。「実は昨年からパッションフルーツの栽培をはじめているんです。一般的には、パッションフルーツは、蜂による受粉は難しいとされているのですが、今年、ものすごく大きくておいしいパッションフルーツができたんです。これから、受粉のいい影響が出てくるんじゃないでしょうか」。これまではA型とB型は別々に仕事をしていましたが、B型の利用者の働きが、A型の仕事にいい影響を与えてくれることで、一体感が生まれる。そんな期待もあります。

楽ワークの巣箱は、いくつかある楽ワークの農場のうちの一つの入り口、作業小屋のそばに、六箱ほど置かれています。JRA（日本中央競馬会）の畜産振興事業助成により支給された巣箱です。

ここでは他にもJRA助成で支給された「蜂払い機」が大活躍しています。通常は一度に大量の巣枠からハチを払わなくてはならない大規模養蜂で使う機械です。しかし、巣枠上のハチたちを、やさしく、素早く払うこと

は、経験がないと難しい作業です。玉城さんは経験もあり、また多少ハチに刺されても平気ですが、養蜂の経験の浅い障害者がやろうとすると、ハチを怒らせ、刺されてしまうこともありま

す。刺されてしまうと、養蜂の仕事がいやになってしまう利用者も出てきます。ハチ払い機を使えば、そうしたことを防げます。フローハイブ巣箱や蜂払い機を導入することで、障害のある人、養蜂の経験のない人が作業しやすい環境が整いました。

「今は六箱ですが、これから、置く場所も広げて、どんどん増やしていきたいですね」と玉城さん。福祉施設が、養蜂によって地域を代表する商品をつくる。そのことで、障害者と地域との新しい関係が生まれてくるかもしれません。

施設名：楽ワーク福祉作業所
所在地：沖縄県南城市
養蜂開始時期：2017年9月
ハチの種類：セイウミツバチ
巣箱の数・種類：フローハイブ2箱
標準単箱4箱



1 埼玉福興株式会社 (埼玉県深谷市)

埼玉県熊谷市にある埼玉福興は深谷市より、深谷ねぎで有名なねぎの産地なのでネギ畑の中、利根川の側に施設があります。埼玉福興の代表の新井利昌さん。農業生産法人としてネギや白菜、苗を作るだけでなく、小豆島から取り寄せたオリーブを育てており、搾油したオリーブオイルは金賞を受賞しています。養蜂を始めしたのは二〇一七年春からです。担当するのは利用者のTさんです。発達障害でコミュニケーションに課題があると聞きしましたが、ミツバチが好きで本を読んで勉強していたのでかなりの知識をお持ちでした。養蜂を始めてからは巣箱の様子を確認するために、巣箱の側までWiFiとカメラを設置

し、アプリでいつでも巣門の様子を観察できるようにしていました。オリーブの木の間タイムやローズマリーなど蜜源植物を広範囲に植えました。が利用者さんが草狩りの際に刈られてしまおうというすこし悲しい出来事がありました。その経験を踏まえて、プラントナーに植えたり、刈られないよう柵で囲ったり、目印を付けるなどの工夫

をするようになりました。ミツバチのいる巣箱にも間違つて入らないよう作業の箱を設置して入れないよう工夫しています。二〇一八年になると巣箱の中の温度や湿度を管理するシステムを導入し、作業時にはGOPROを設置して後から振り返りをしているそうです。ミツバチを見守るまなざしは暖かく、日頃の様子を丁寧な文字で毎日記録しています。今年ハチミツの収穫ができませんでしたが、来年も蜜源植物を植えることも含めて、養蜂技術を学び続けていくつもりです。こちらの施設ではTさんの文章で事例を紹介させていただきます。



重い労働のできない障がいのある人たちが、自然から助けられるような形で働くことはできないか。そんなことを模索していたときにミツバチと出会いました。折りよくトウヨウミツバチ協会さんの協力を得ることができました。

ニホンミツバチを飼う。私たちはミツバチにニホンミツバチとセイヨウミツバチがいるということも知りませんでした。どうやらニホンミツバチは大人しく、世話をしやすいらしい。それに、初期のコストがあまりかからない。そんな話を聞いて、やってみることにしました。

ある年の四月ごろ、畑の東の端の陽がよくあたる場所にニホンミツバチの待ち受け箱をおきました。こまめに見まわってミツバチが来るのを今か今かと待ちました。しかし、なかなかミツバチはきませんでした。半ばあきらめかけた七月頃、ふと巣箱はどうなったかど見に行ってみました。すると、巣箱からシュッと黒い粒が飛び出し、太陽の光を受けて輝きながら、どこかへ飛んでいきました。まさかと思つて巣箱に顔を近づ

けると、今度は飛んできたムシがびたっと着地してささっと巣箱の中へ入っていました。

「ミツバチだ!」。驚きどうれしさが同時にわきあがり、しばらくはそのムシたちの動きをながめていました。後にトウヨウミツバチ協会さんに問い合わせるとそのムシはニホンミツバチではなく、セイヨウミツバチでした。

その後、ミツバチの観察を毎日続けました。絶え間なく働くミツバチのかわいさを知り、刺されると怖くなり。与えた砂糖水があつという間



になくなる食欲さ。スズメバチにはなすすべもない可憐さ。ミツバチたちは私たちにどつてただのムシではなくなりました。自然の中でも生きる仲間となつていきました。

最初の内検では非常に緊張しました。ソーッと蓋をあけるとミツバチがびっしり。その活気ある元気なミツバチの姿をみると緊張が解け、安心したのを覚えています。後に、ミツバチの状態をもっとよく知りたいと思ひ、巣箱にセンサーを設置しました。巣箱の中の温度がある程度一定に保たれているのを知つてミツバチたちの能力に感心しました。

現在は、ミツバチたちの居心地のよい環境を作ろうと、蜜源になる木、花、ハーブなどを植えています。香りよいハーブや花の彩り、それらがミツバチにどつていいものであると同時に、人間にも優しい癒しを与えてくれます。ミツバチと私たちは互いに与え合い、また受け取り合い、共に生きる仲間としての関係を築いていくことができます。その関係をこれからより深めていければいいなと思っています。



2 障害者支援施設あまみん (鹿児島県奄美市)

「障害者支援施設あまみん」は、NHK大河ドラマ「西郷どん」にも登場する奄美大島の、まさに西郷隆盛が逗留したであろう龍郷町の大勝にある就労支援B型の障害者施設です。田んぼと雑木林を見わたせる高台に位置しています。

地域で養蜂を担当するのは代表の田中基次さん。農学部出身で昆虫とは親しみがあったのですが、卒業後は昆虫に触れ合う機会は減っていたとのこと。ここに来てミツバチに触れ合うことになるのは、これも虫のついでに縁かもしれないですね、と笑顔で話してくれました。あまみんさんでの農福連携の取組は地元農家さんのモチモチのお手伝いやパラフライビー(豆)を生育、収穫してお茶として製品化したり、マンゴーの育成から収穫作業までお手伝いしています。養蜂は二〇一八年二月からスタートし、セイヨウミツバチ二群を地元の養蜂家さんから譲り受けました。奄美大島には



セイヨウミツバチも二ホンミツバチもいるとのこと、今回はより収穫が期待でき、収穫できたハチミツを製品化する可能を模索したいと思っただけです。

奄美大島は暖かく、ミカンやイチゴの花の蜜が採れたら嬉しいと夢を膨らませました。地元養蜂家さんからの支援も期待できるということで、地元のプロの養蜂家さんならではの地元の年間を通じた気候と蜂群管理や蜜源植物について、日頃のちよとした作業時の疑問など近くの方にアドバイスをもらえば上手いきやすいくと考えたからです。奄美大島では養蜂講座を開催し、養蜂を始めるにあたっての注意事項や地域とのコンセンサスについて、実際に収穫できたらどのように活用していくのか、地域での商品化や六次

産業についての話などもしていただきました。セイヨウミツバチからは一〇キロのハチミツが採れ、利用者さんと一緒に採蜜の作業を行いました。作業の前に「ミツバチの近くではゆつくりと、静かに動きまわろう。一緒に行きましようね。怖かったらすぐについでください。」ゆつくりと作業が始まりました。フローハイブのレバーを回してハチミツが出てくる様子を見つめる利用者さん、その様子をスマホで撮影する利用者さん。採れたハチミツを味見して、「ものすごくおいしい!」と笑顔を見せてくれました。最初は怖いから作業をためらっていた利用者さんは巣門の前を出入りするミツバチの様子をじつと見つめています。

将来的には地元のマンゴーを冷凍させてジラートに活用するために、助成金を申請し、本格的に始動しています。同じ奄美大島の障害者福祉サービス事業所「夢来夢来(むくむく)」さんでも収穫したハチミツとコラボしたパンを作りたいねという打ち合わせをしました。今年はおオスズメバチと規格外の台風で打撃を受けた養蜂元年でしたが、来年も養蜂プロジェクトは継続していくそうです。



3

就労支援事業所 米ライフ(石川県河北郡)

石川県と富山県の境の山あいには、米ライフの養蜂場があります。養蜂作業を担当するのは施設を管理する相良景子さんとお母さまの田中真由美さんです。こちらでは女性が中心になってセイヨウミツバチ二群を、地元養蜂家さんのサポートを受けながら行っています。春には桜が咲き、植林されていない雑木林が蜜源として期待できるのでないかと考えたそうです。養蜂を検討したきっかけは養蜂講座を開催したことでしたが、同時



期に地元養蜂家さんから巣箱を置かせてほしいという要望があったそうです。農福連携の取組として米作り、野菜作りを行っており、米粉を使ったドーナツなど商品化もされています。ハチミツでさらに付加価値の高い商品化をめざそうという狙いがありました。捕獲は叶いませんでしたが待受け箱設置の際は男性の施設利用者さんに重い箱を運んでもらいました。どのくらい蜜が溜まるのか分からないので、養蜂家さんがセイヨウミツバチ巣箱を一箱設置しましたが、電柵を設置しなかつたので熊被害にあつてしまったそうです。

4

NPO手と手就労支援センター しずくみのり菜園 (北海道余市町)

北海道余市にあるみのり菜園の担当者柳瀬麻由子さんは自然栽培農学校の講師も務めています。「奇跡のリンゴ」の木村秋則さんが指導に来て、りんごやさくらんぼ、野菜を自然栽培で育て、農法を教えてください。生徒さんは北海道のみならず海外からも来るそうです。二〇一八年セイヨウミツバチの受粉用の巣箱設置として試験飼育と共にスタートした養蜂プロジェクトはさくらんぼの木の下で始まりました。来年度以降の飼育に向け蜜源植物を植え、耕作放棄地の候補地を見つけ植える植物と種の子算をどのようにねん出するか打ち合わせしていました。来年度から養蜂を始められるよう七月には次年度の養蜂の申請をして地域の皆さんにみとめられ少数群で養蜂を始めることが決まりました。今年には台風が地震があり計画通りにはいきませんが、来年にに向けて準備を進めています。



5 社会福祉法人無門福祉会 (愛知県豊田市)

今回のプロジェクトで農福連携と関わるきっかけとなった自然栽培パーティーの理事長の磯部竜太さんの施設である無門福祉会では愛知県豊田市にあります。ニホンミツバチを飼育し、畑を養蜂家さんにお貸しして、セイヨウミツバチのハチミツを採取しています。今はセイヨウミツバチの養蜂まではするつもりがないので、信頼できるプロに巣箱を置いてもらい、ハチミツを分けてもらっているそうです。



自然栽培の畑に設置したセイヨウミツバチは近所の木や畑のみかんを授粉してくれます。無門福祉会さんは農福連携の取組として野菜を育てるだけでなく地元の地域の住民の方に応援されています。現在日本の耕作放棄地は九州の面積分にも相当するといわれていますが、農業をしたくとも中々借りることが難しいという現状だそうです。地域の方に応援してもらいながら四年目でスタート時から五〇〇倍の農地面積を増やしたそうです。地元の農業生産法人と連携して野菜作りを始めたことで利用者さんの体力もつき積極的に作業に取り組むようになってきたそうです。



農福連携を事業化するにあたり、農業には障害者が活躍できる場面がいくつもあるが「お金のものさし」を入れた途端活躍できなくなるという現実を目の当たりにしたそうです。そこで作業のお礼として収穫物を分けてもらい、商品化をはかったりマルシェで販売するなどして事業を継続しているそうです。ニホンミツバチは施設の一階にある広いベランダに設置してあります。時々屋上上がったは巢門から出入りする様子を観察し、命を繋いでいく様子を楽しく観察しているそうです。無門さんでは紅茶を提供するカフェでクッキーを販売しているので、将来的にはカフェでハチミツを利用したいと考えています。

をしたり積極的に情報発信を行っており、ニホンミツバチは家族や利用者さんと一緒に毎日様子を観察しています。二〇一八年から二群でスタートしたニホンミツバチですが、途中一群がいなくなってしまう現在は一群で冬を迎えようとしています。市民農園を作り、自然栽培を始めましたが、横では蜜源植物を植えています。幼稚園脇には菜の花を植えました。「子供たちの通学路だからいいでしょう？ミツバチにとっても役立つことが嬉しいです。」と笑顔で話してくれました。蜜源に応じた蜂群数を置いた



めにミツバチを殖やすことはせず、自分で管理できる少数の群れを家族や仲間として大切に一緒に暮らしていく、もしハチミツが収穫できたらそれはありがたくみんなで楽しみたいということです。



7 スマイルベリーファーム (静岡県富士市)

富士山にかかる白い雲と茶畑の緑が印象的な静岡県のスマイルベリーファームでは豊田由美さんが養蜂を担当しています。数年前にセイヨウミツバチの飼育を行いました。ブルーベリーや地元の農家さんの応援、地元のみかでドレッシングを商品化したりヤギと鶏を飼育しています。ニホンミツバチは二〇一七年六月に地元の神社の祠に自然巣を発見し、許可を貰い巣箱に移し替えの作業を行いました。残念ながら秋には群れは消滅してしまいましたが、スタッフさんと利用者さんの間にミツバチに対する関心が高まりました。秋に見つけた虫をニホンミツバチの女王かどうか確認したり(地蜂でした)分封群を捕獲しにいたり確実に経験を重ねてきました。最初はミツバチは怖いから近くに寄らないと断言していた利用者さんも作業するときに「ふしぎだね!」と興味を持って一緒に作業してくれました。

6 縁活おもや (滋賀県栗東市)

滋賀県栗東市にあるおもやさんは農福連携の取組としてお米や野菜を作り、カフェで野菜たっぷりの料理やお弁当を提供しています。施設の杉田健さんは「蜜蜂からハチミツをとって事業化する、いくら儲けるといふより、人も蜜蜂も一緒に心地よく暮らす環境作りと関係を育てていきたい。」と話しています。杉田さんは野菜を作るだけでなく種についての勉強会

